

# 入試分析 国語

## 【総評】素直に解ける問題。昨年並みの易しさ。

国語で高得点を確保できた受験生が、今年も合格を勝ち取るのでは？

1・2が漢字の読み取り・書き取り、3が物語文、4が論説文、5が評論文という構成は今まで通り。受験者平均点は80点前後を推移している国語だが、今年も素直に考えれば正解できる問題が多く、落ち着いて解き進めれば90点以上を確保することも可能だ。

## 【問題分析】

### 1・2 漢字の読み取り・書き取り(1問2点×10問=20点)

1の「挿す」「据(える)」の読み取り、「(レンガ造りの)ヨウカン」の書き取りができれば、漢字の問題は全問正解できるだろう。なお、2の書き取りはすべて小学校で習う漢字であった。

### 3 物語文(1問5点×5問=25点)

すべて選択形式の出題。問1から問5まで、すべてが傍線部の前後に描かれた内容で判断できる素直な問題。学生を登場人物として扱った小説からの出題が多い都立共通問題の国語だが、今回も天文部に所属する高校生の話。転校する友人と主人公たちの思い出に残る「青春」の一ページを描いている。別れはさびしいはずだが、これからもネットを通じて交流は続くというのは、中学生にも当然の感覚だろう。

### 4 論説文(1問5点×4問+200字作文10点満点=30点)

問1から問4までが選択形式の問題。話題は一貫して比較的可かりやすい内容だった。ヒトは一人では生きられないため、「私」と「あなた」が同じ「外界」を共有し合える高度な能力、「三項表象」が備わっている。しかし、実際に互いを理解し合うことは難しく「共同幻想」とも言える。ときには誤解や恨みも生じる。それでもこの幻想のおかげで、ヒトは共同作業に邁進し文明を築いてきたのだという話だ。問5の作文は「互いの思いを一致させること」というテーマ。ひょっとすると3の物語文がヒントになったかもしれない。

### 5 古文を伴う評論文(1問5点×5問=25点)

すべて選択形式の出題。今年は言語事項の問題が助詞の識別の1問のみで、本文内容に関する出題が1問増えてやや難化した。都立高校の出題はいわゆる古典の問題ではない。引用される古文にはすべて現代語訳が付いており、古語の意味を問う問題もその現代語訳から探すだけだ。あまり馴染みのない内容に惑わされず、落ち着いて解き進めればよい。過去問や模試で何度も練習して、都立高入試独特の出題に慣れておくことも大切だ。

## 入試に向けての学習アドバイス

文法や言語事項以外、残念ながら中学校の授業ではまるで対策できない。ただし都立高入試の共通問題では国語が非常に易しい。普段から話題の新書や古典を扱った随筆を習慣的に読んでおくことはおすすめしたい。(白洲正子の著作は都立高入試での出題率が高く参考になる。)

なお、北進ゼミナールの授業ではテキストを使って、普段あまり自分からは読まないようなジャンルの論説文を中心に解く機会を設けている。実は、これが一番手っ取り早い入試対策かもしれない。